KSKR パンジーだより　No.93　第三種郵便物認可　通巻第 9079 号　2023 年 9 月 7 日発行

KSKR パンジーだより

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

選挙の扉を開く　― 知的障害者の新たな挑戦と可能性 ―

頼もしい友人から3年ぶりに連絡がありました。知的障害者や移民に対して、わかりやすい言葉で情報や学習の機会を提供してきた菅谷泰行先生でした。先生は、「ドイツ語圏でのやさしいことば」の研究者です。先生の提案は「コロナも落ちついたので、選挙を学ぶ会を作りませんか」というものでした。そして私たちの新たな挑戦が、今年の5月から始まりました。

選挙は知的障害者にとって容易なものではありません。どこへ行けばいいのか、誰に投票すればいいのか、投票はどうすればいいのかという一連のプロセスが困難を生んでいます。そこで私たちは先生と一緒に、「選挙って何ですか？」から学び始めることにしました。学ぶたびに、当事者の心は少しずつ開かれ、前向きになっていきました。

ついに迎えた5回目の学習会は、「選挙を体験しよう」。選挙管理委員会の皆さんの協力により東大阪市役所の期日前投票所で、実際の投票箱や投票用紙を使っての模擬投票です。参加者は30人の知的障害者。選挙についての学習、少人数グループでの投票練習を経て、模擬投票に臨みました。学習と練習を丁寧に進め、誰を選ぶかも一人ひとりが決めました。その結果、模擬投票は驚くほどスムーズに進み、それぞれの顔には達成感と自信がにじみ出ていました。

みんなのやり遂げた顔を見た時、私たち職員は、大切なことに気づきました。みんなは選挙に興味がなかったわけではなかったのです。健常者と同じように選挙に参加したいと願いながら、どこから始め、誰に助けを求めれば良いのかわからなかったのだと思います。また、私たち支援者も、候補者についてどう説明すればいいのかなど、選挙の支援に迷いを感じていました。しかし、この学習会を通じて迷いは吹き飛びました。今後はますます選挙そのものへの理解を深め、投票所へ一緒に行こうと思います。

私たちはこの経験を通じて、菅谷先生が提唱する「やさしいことば」の重要性を再認識しました。また一つ、新たな可能性を感じています。

（林　淑美）

自立への挑戦！　300人が共有した「大空へはばたこう」

６月１５日、「大空へはばたこう～自立への挑戦～」の上映会とシンポジウムを開催しました。難しいとも言えるテーマにもかかわらず３００人近い人々が参加してくれました。その中には、前日に掲載された新聞を見て、何としてでも参加したいと駆けつけてくれた人たちもいました。

シンポジウムでは、知的障害当事者、その親、学者、入所施設の職員、地域の支援者と、さまざまな立場からの意見がありました。その中で共通していたのは「どうすれば当事者が一人の人間として地域で自分らしく生きられるのか」。その問いへの答えを模索する姿勢でした。

参加者からは「ぜひともこのような上映会を開催したい」という感想が多くありました。私たちは早々に今後の上映会について準備を進めています。そこで再び起こる出会いや絆が、知的障害のある人だけでなく、誰もが地域で自分らしく暮らせる社会を作るきっかけとなることを信じています。

心を解き放て

ファシリテーター　　小川道幸（映画監督）

私が知的障害のある人と最初に出会ったのは２０１５年でした。それまでの私の人生で、ほとんど触れたことのない人たち。彼らと何を話しどのように接すればよいのか、近づくことも声をかけることもできませんでした。

それから８年。知的障害者と一緒に映像を作ってきた今、最初に感じた戸惑いはすっかり消えました。それまで仕事をしてきたテレビ界の価値観を持ち込んでも、知的障害のある人たちの思いを伝えることは出来ません。彼らのありのままの姿、その存在を受け入れた時、知的障害者の様々な姿の意味が見えるようになってきたのです。

「大空へはばたこう」を作っている時、一番意識したのは知的障害のある人たちの“目線”でした。彼らと同じ地平に立ち、彼らと同じ意識で語ろう。そのために取材は知的障害当事者。カメラや音声、ナレーションや選曲は、すべてパンジーの職員にお願いしました。テレビなどの映像の経験者は、私を除いて誰もいません。カメラマンや音声などにプロの人たちを使えば、もっといい映像、もっといい音が録れるかもしれません。また、声優や音効の専門家を使えば、もっといいナレーションや音楽をつけられたのかもしれません。しかし、そこには社会の中にある知的障害者への偏見が無意識に入ると思いました。それを少しでもなくすために、ふだんから知的障害者と接しているパンジーの職員にお願いしたのです。

社会の人たちが、自分の価値観で知的障害のある人をみるのではなく、自分の心を解き放ち、色をつけないで向き合ってくれた時、社会には彼らを遮るものがない、まさに「大空」になり、みんなが自由にはばたけるのだと思います。

「大空にはばたこう」の上映は始まったばかりです。また、知的障害者の自立をテーマに語ったシンポジウムも含め、この小さな動きが、いつか大きな波になり、すべての知的障害者が社会の中で自分らしく生きられる世界が実現できると夢見ています。

「ぼくたちは、一人の人間として地域で自分らしく生きたい」

知的障害者の思いが実現するために ――シンポジストの視点――

久保厚子（保護者）全国手をつなぐ育成会連合会　会長

知的障害のある人と家族は困難な状況にあります。特に重度の場合、支援者や家族の支えが必要で、親も安心できる場所を求めています。しかし、環境や健康上の問題などで難しい状況があります。障害者支援だけでなく、家族全体への支援が必要であり、地域の環境整備も不十分です。

親は国や行政による対応を求めつつ、自身も考え方を変える必要があります。地域での暮らしは困難な場合もありますが、親は受け止める役割を果たし、安心感を与えることが重要です。

障害のある人も成長し、親元を離れることが当たり前だという認識を持つことが必要です。国や行政、自治体、法人も覚悟を持ち、支援を行う必要があります。しかし、家族がこのような生活を理解するためには情報や経験が不足しています。また、国には資金と仕組みの提供を求め、地方自治体にも支援を期待しています。

鈴木　良（研究者）同志社大学社会学部教授

国連の総括所見によると、日本の障害者支援施設にはいくつかの課題があります。特に入所施設の居住者数が多く、国連はその数を減らすように求めています。自立生活への移行も重要視されています。日本の予算のうち、施設系サービス(障害者支援施設とグループホームを含む)の割合が大きいため、国連はこの割合の変更を指摘しています。また、グループホームにおいても問題があり、大規模な施設が増えていることが指摘されています。グループホームの居住者数が急増しており、10 名以上のグループホームは国際的に問題視されています。重度訪問介護においても、子供が利用できないことが課題とされています。国連は子供の施設収容を厳しく批判し、在宅でのサービスの強化を求めています。国の責任として、施設の閉鎖や福祉計画の改善が必要とされています。拘束力の強い法律や予算の増額が必要です。施設の閉鎖に伴い、具体的な制度上の対応策も検討されるべきです。国が家族や地域を支援するためには、補助金の提供や具体的な制度改革が不可欠です。

山田　浩（知的障害当事者）ピープルファーストジャパン

僕は昼間はパンジーメディアで活動しています。津久井やまゆり園を出てきた人たちを取材しました。みんな新しい環境に慣れてきたようで、とても楽しそうでした。今年の 1 月に、北海道のあすなろ福祉会で知的障害のある人たちが結婚や同棲をする場合、不妊処置をしなければグループホームを出なければならないという話がありました。僕は江差町まで行って理事長に抗議しました。子供を産ませずにグループホームを追い出すのはおかしいと思ったからです。江差町や北海道庁にも行きましたが、役人の対応は悪かったです。何も答えず、本当に腹が立ちました。僕が望んでいるのは、入所施設をなくし、地域で安心して生活できるようになることです。当事者は声を上げて反対運動をしないといけない。入所施設を解体し、地域での安心な生活を実現するために頑張りたいと思っています。

大黒哲史（入所施設職員）大阪府立砂川厚生福祉センター

砂川厚生福祉センターは知的障害者の地域生活への移行を目指して運営していますが、施設だけでは地域生活移行支援が不十分です。当事者や家族だけでなく援護の実施機関である市町村の積極的な協力も必要です。

私たちは、地域で困っている重度の知的障害者の方々を受け入れ、再び地域に戻っていただく、循環型のサービスを目指しています。しかし、最近は激しい行動障害を示す方が増加し、地域生活移行者数が減少しています。市町村ごとに課題や問題が異なり、重度の方の受け入れやグループホーム等の不足が課題となっています。社会資源やグループホーム等の設備面の問題もあり、移行後のネットワークの構築が重要です。

家族の不安も大きな課題です。施設での安定感と将来の不安感が重なり、利用者の意思決定をどのように支援するか、悩むことがあります。地域移行の可能性を説明しながらも、一歩を踏み出すことは簡単ではありません。行動障害やトラウマを持つ方が多く入所しており、利用者の生活を考えながら情報提供と安心感の提供に努めています。これらの課題は時間を要するもので、家族の気持ちを軽視せず、慎重に考える必要があります。日々の努力で理解を深めることが重要です。

林　淑美（地域の支援者）社会福祉法人創思苑　理事長

私が入所施設で働いていた頃、地域の学校への通学は困難で、子供を学校に通わせたい親は入所施設を頼るしかありませんでした。私は、泣き叫ぶ子供を抱っこして帰る親を何度も見送りました。しかし、時間が経つにつれて、障害のある子供たちは自宅の中にさえ帰る場所を失いました。彼らが本当に望んでいたのは質の良い入所施設を作ることではなく、家族と一緒に暮らすことでした。

創思苑ではこれまでに何度も地域移行支援を行い、10 人の人々が入所施設から地域での生活を始めました。移行のプロセスでは、当事者が日中活動やグループホームを見学し、体験宿泊を経験しました。この期間は、自己形成や自己決定の力を養う支援になります。言葉でのコミュニケーションが苦手な人もいますが、彼らは行動や表情で確かな意思を伝えていると考える必要があります。

知的障害者は地域で自分らしく暮らしたいと願っています。これに応え、東大阪市では、強度行動障害のＣＹさんの自立生活移行を支援しています。このケースでも重要なのは保護者との信頼関係を築きながら、早い段階で支援を行うことです。

＜来場者の感想＞

・映画は本当にショッキングでした。人間として絶対に許せない内容です。素晴らしい、実に良い映画でした。この映画の効果は絶大です。

・「地域移行」「地域共生社会」とかよく耳にする昨今ですが、身近に実感することがほとんどありません。映画に登場した障害当事者の方々の姿や思い、今日までの歴史や課題を知ることができて本当によかった。

・知的障害者の思い、制度の歴史など、とても勉強になり、あっという間の時間でした。

「大空へはばたこう～自立への挑戦～」を地域の人々に上映する機会を作りませんか？　知的障害者の現状を理解し、彼らをサポートするためには、私たちのネットワークと理解が欠かせません。この上映会は、地域の人々に知的障害者の現状について深く理解する機会を提供します。
ぜひ、上映会を企画してください。心からお待ちしています。

それぞれの新しい生活のスタート！

はじめの一歩　パンジー

「おかわりっ」。そう言って夕食の牛丼をモリモリ食べているのは、これまで偏食が強かった山内英樹さん。この夏からグループホームで自立生活を始めました。山内さんは医療的なケアを必要とし、実家を離れてのくらしには多くの課題がありました。しかし、家族と訪問看護の連携により、新たな一歩を踏み出すことができたのです。

また、山内さんは食事の好き嫌いも多く、心配な気持ちもありました。しかし、山内さんは、グループホームに住み始めてから、これまでの拒否はどこへ行ったのか、自分から意欲的に食べるようになったのです。「どうしたんだ山内さん？！」と思った瞬間、彼の中にある新たな一面に気付かされました。

それは、親元を離れて自分の部屋を持ち、身の回りの支度や掃除を自分で行うこと。仲間と共に地域のお店まで買い物に出かけることなど、自分ができることを最大限に生かした体験によって、自信ややる気がわいてきたのではないか。そして、彼がもともと持っていた意欲的な力が発揮されたのではないかと思いました。

同じグループホームで新生活を始めた小原佑介さんと須恵強さんも親元を離れた生活は初めてです。ショートステイを経て少しずつ自立に向けての準備をしてきた2人。家族の愛情や居心地の良さがあるからこそ、新しい環境での生活には課題がありました。しかし、自分でできることを自分で行い、仲間と経験を共有するなど、彼らの環境は大きく変わってきています。

これまでルーティンだった決まりごとを柔軟に変更できるようになったり、調子の波があった人がいつも明るい表情を見せるようになったり。

この新しい生活のスタートは、彼らがこれまで毎日、一歩一歩あゆみ進めてきた当事者それぞれの挑戦が、今の姿に繋がっているのだと感じています。

（北田　徹）

ゆれ動く心　パンジーⅡ

パンジーⅡの石田桃子さんがついに今年6月、グループホームに入居しました。しかし、ここまでの道のりは平坦ではありませんでした。

石田さんは3年以上前からグループホームでの生活を夢見ていましたが、コロナウィルスの感染拡大によって一旦その決断を見合わせました。ウィルスへの不安と、今の生活を大切にしようという想いが胸にあったのでしょう。

3年の月日が経ち、ようやくコロナが落ち着き、グループホームへ入居することができました。

この間、石田さんの心は揺れ動きました。自立への想いは時に後ろ向きになったり、その時の生活に満足してしまう時期もありました。だけど、ホームの見学や体験を通して、自立への強い意欲を取り戻していったのです。

特に心配していたのは、石田さんのお母さんでした。自立生活が本当にできるのか、不安と心配が大きかったようです。

しかし、入居して2カ月が経ち、石田さんは新しい生活を楽しんでいると笑顔で答えます。「お母さ

んが家に帰るとやさしいねん」と話す石田さん。お母さんも安心されたのかもしれません。

パンジーⅡでは、奥園幸聡さんと難波広明さんも新たにグループホームでの自立生活をスタートさせました。それぞれが不安を乗り越え、自分らしい生活を送っています。

これからも、彼らが自分らしい暮らしを築けるよう、心をこめて協力していきます。（西野貴善）

共に歩む決意

パンジーⅢ

7月7日、七夕の日。この日は特別な出来事がパンジーⅢのホールで開催されました。清水一男さんと池田真紀さんが一緒に暮らし始めたのを祝うパーティが行われたのです。

2人はずっと仲がよかったのですが、最近になって一緒に住みたいという思いが芽生え、ついに6月から同じグループホームでの新生活を始めました。

パーティでは、2人が一緒に生活するために相談していた「ハートブレイク」の黒瀬さんから祝福の言葉が贈られました。皆で乾杯し、友達からの花束や、会場に集まったみんなからのたくさんの祝福の言葉に、2人は本当に幸せそうでした。

最後に、清水さんは会場に来てくれた皆さんに「本当に、本当にありがとう」と、感謝の気持ちを伝えると、会場は拍手と感動に包まれました。

パーティが終わった後、黒瀬さんのもとには人々が集まりました。自分も好きな人がいる、恋人が欲しい、結婚したいという相談をしていました。みんなの期待に応えるべく、ハートブレイクの恋愛勉強会を再開しないといけないですね！（山本俊作）

自立ホーム国分のはじまり

パンジーⅤ

2023年4月17日、香川県にパンジーⅤ初のグループホーム「自立ホーム国分」がオープンしました。古民家を改築した建物で、男性3人、女性2人の男女混成ホームです。

オープン前、入居者や家族、支援者は新生活への期待と不安を抱えていました。

初日、重度の行動障害のある難波諒さんが送迎車から降りませんでした。しかし、次第に部屋に慣れ、笑顔も見せるように。入浴や夕食が終わると、ますます落ち着きを見せ、ホームでの生活を楽しんでいます。

不調だった内田雅子さん、大野公士さんはホーム入居を決断し驚くほど早く慣れ、笑顔で暮らしています。

浅野真岳さんと三谷浩美さんは長らくグループホーム入居を待ち望んでいました。初めは緊張した様子でしたが、仲間と共同生活しながら自由な生活を満喫しています。

トラブルもあるものの、支援者の存在がホームでの生活を支えています。しかも心配していたよりもずっと落ち着いて、楽しく生活できています。自立したい当事者が、希望をかなえられるよう、精いっぱい支援していこうと思います。（植田弘）

NHK 歳末助け合い助成金
赤い羽根共同募金助成金を受領しました！
ありがとうございました。

電動草刈り機

パンジーの畑では農薬をまったく使っていません。木の枝や草を土に混ぜ込み菌を育てることで、野菜をおいしく、大きく育てる有機栽培に取り組んでいます。雑草も大切な資源になるため、普段から刈り取って集めています。しかし手作業で草を刈ると、作業ははかどらず、雑草の勢いに負けてしまっていました。あたり一面のその緑は、絶望的な景色にも見えました。

この度、「NHK 歳末助け合い助成金」により電動草刈り機を購入できたのです！　歯の部分がゴム製にも取り換えられ、安全に使える最新式です。購入した当日、さっそく試してみました。１時間もすると、手作業の何倍もの範囲の草を刈り取ることができました！　草刈り機という頼もしい味方がきてくれたことで、雨あがりの緑一面の景色が、もう絶望的なものではなく、「今日も畑の元気の源がたくさん生まれてる～」と、宝物にさえ感じられるようになりました。（見舘　史郎）

玄米保冷庫、自動精米機

赤い羽根共同募金からの助成金で、パンジーⅡは玄米保冷庫と自動精米機を購入できました。

体に良いものを届けるために、白米も無農薬のものを提供したいと思っていましたが、なかなか実現しませんでした。しかし、これからは香川県から仕入れた無農薬玄米を精米して、白米のニーズにも応えていけるのです！

伊藤さんは大きな精米機を見て「おっきいなぁ、使ってみたい！」と気持ちが高まっていました。これからも当事者とお米を精米して、おいしい無農薬のお米を地域のみなさんに届けられるよう、パンジーⅡ一同ますます頑張っていきます。ありがとうございました。（横山　壯太）

送迎用自動車

パンジーⅤでは、赤い羽根共同募金の助成で送迎用自動車リフト付きキャラバンを購入しました。当事者が増え、送迎や畑仕事、清掃に行く車が足りなくなってきたので大変ありがたい助成でした。大事に使っていきたいと思います。

送迎用自動車総事業費 3,729,360 円、
助成額 1,500,000 円）
（平福　貴行）

書き損じハガキ、（未使用）切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？
当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。

パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員　１口　1ヵ月　　５００円　　本会員　　１口　1ヵ月　1,０００円
特別会員　１口　1ヵ月　3,０００円　　郵便振替番号 00950-1-300551　ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ「パンジー」

上映会を開きませんか？　DVD も好評発売中

知的障害を持つ人たちについて、もっと知ってもらうために、社会を変える力にしていくために
パンジーメディアは、出張上映会を行っています。

『大空へはばたこう～自立への挑戦～』

『ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの』『みんなに伝えたいこと』など多数。

シンポジウムや人権の研修会、学校の授業、事業所の研修など、パンジーメディアの映画を通して、
語り合いや交流の輪が生まれ、知的障害がある人たちへの理解が広がっていくことと思います。

費用・内容は、パンジーメディア　072-968-1615 にお問い合わせください。
メールでもOKです！　pansymedia@pansy-net.or.jp　**（DVD も好評発売中）**

ピープルファースト大会
今年は、大阪で開催！

今年も熱い大会になります。

入所施設をなくそう！
差別・虐待をゆるさない！
世界や新しい仲間とつながろう！

詳しくは
こちらより

編集人
クリエイティブハウス「パンジー」
東大阪市東鴻池町 2－4－8
TEL:072-963-8818
FAX:072-963-8825

発行人
関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町 2-2
東興ビル4階

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価　１００円